

大雨の被害に対する農作物の病害虫防除

7月14日から16日にかけての大雨により、多くの水田や畑地で浸水・冠水が発生しており、今後の農作物への影響が懸念されます。

については、農作物の被害を最小限にとどめるため、以下を参考に早急に対策を講じてください。

当情報は、水害により想定される病害虫対策を中心に情報提供しますので、「秋田県農作物異常気象対策本部 農作物異常気象対策指導班」発行の「大雨の被害に対する農作物等の事後対策」と合わせて対策を講じてください。

◎ 共通

浸水・冠水により、農作物全般で根傷みや茎葉の損傷が発生するとともに、植物体の草勢・樹勢低下により病害虫への抵抗力が低下しています。

また、梅雨前線の活発な活動により、一部飛来性害虫の発生が多くなる可能性があり、引き続き害虫の発生動向に注意してください。

- 1) ほ場内の排水路を確認し、停滞水がある場合は速やかに排水する。
- 2) ほ場を丁寧に見回って病害虫の発生をよく観察し、早期発見・早期防除に努める。
- 3) 病害には感染後3～5日程度の短期間で発生するものの他、7～14日後に発生が見えてくるものもあるので、ほ場の見回り・観察は継続して実施する。また、病害の予防として殺菌剤を発生拡大前に散布する。
- 4) 飛来性害虫（ウンカ類、オオタバコガ等）は短期間に急増することがあるため、発生を確認したら直ちに薬剤防除を実施する。
- 5) 殺菌剤・殺虫剤ともに降雨により残効期間が短くなるため、降雨が続く場合には散布間隔を短くしたり、雨前・雨間散布に努める。
- 6) 薬剤防除する場合は、散布後の高温により薬害が生じやすいので、朝や夕方涼しい時間帯に行う。

以下、各作物別の想定される病害虫と対策について掲載します。

1. 水稲

1) いもち病

浸水・冠水により、稲体の抵抗力が低下して感染しやすい状態となっている。そのため、治療・予防剤のノンブラスやブラシン、予防剤のビームで防除に努める。

種類	農薬名	農薬の種類	粉剤 DL	ゾル	フロア ブル	散布量又は 希釈倍数 [散布液量]
治療	ノンブラス	トリシクラゾール・ フェリムゾン剤	○		○	粉剤DL：3～4kg/10a ゾル・フロアブル： 1,000倍 [100～150L]
予防	ブラシン	フェリムゾン・ フサライド剤	○		○	
予防	ビーム	トリシクラゾール	○	○		

注意事項

ア、茎葉散布剤の防除効果は7日程度であるが、降雨が多い時や病勢が激しいときは薬剤の散布間隔を短くする。

イ、フサライド、トリシクラゾールの本田での総使用回数はそれぞれ3回以内である。

葉いもちが既に多発している場合は、穂いもち防除として出穂15～7日前にコラトップ剤又はゴウケツ粒剤／サンブラス粒剤のいずれかを散布するか、出穂直前にトライフロアブルかビーム剤と穂揃期にトライフロアブルかラブサイド剤で茎葉散布を行う。さらに、必要に応じて傾穂期にもラブサイド剤による追加防除を行う。

農薬名	農薬の種類	粒剤	粉剤 DL	ゾル・フ ロアブル	散布時期	散布量又は 希釈倍数 [散布液量]
コラトップ1キロ粒剤2	ピロキロン 剤	○			出穂15～ 7日前	1～1.5kg/10a
コラトップ豆つぶ						250g/10a
コラトップ粒剤5						4kg/10a
ゴウケツ粒剤 サンブラス粒剤	トルプロカ ルブ剤	○				
トライ	テブフロキ ン剤			○	出穂直前 穂揃期	粉剤DL： 3～4kg/10a
ビーム	トリシクラ ゾール剤		○	○	出穂直前	ゾル・フロアブル： 1,000倍
ラブサイド	フサライド 剤		○	○	穂揃期 傾穂期	[100～150L]

注意事項

ア、粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。

イ、茎葉散布剤を散布した後、数日以内の積算降水量が液剤の場合200mm、粉剤の場合100mmにならない場合は再散布する必要がない。

ウ、傾穂期以降のビームゾルの散布は、葉の黄化や葉先枯れなどを生じることがある。これは有機リン剤、カーバメート剤などとの混合によって助長されるので、この時期、本剤の使用は避ける。

エ、テブフロキンの本田での総使用回数は2回、フサライド、トリシクラゾールの本田での総使用回数はそれぞれ3回以内である。

2) 黄化萎縮病

浸水・冠水を受けたほ場では、1～2週間後、新葉に黄化等の病徴が現れる。特に、直播水稻や生育が遅れている移植水稻では注意が必要である。罹病株はいもち病やごま葉枯病に罹りやすいため、併せて防除を行う。

3) アワヨトウ

浸水・冠水で軟弱となった水稻で、被害が多くなる傾向がある。群生相となった黒化型の幼虫が確認された場合は、直ちにスミチオン乳剤又はスミチオン粉剤3DLで防除する。

2. 大豆

土壌の酸素不足により、根の活動の抑制や根腐れ症状の発生が懸念される。併せて、土壌病害の拡大が予想されるので、排水路を点検し、溝が崩れていたり、浅くて流れない場所があれば手直しして排水に努める。

1) 茎疫病

停滞水又は冠水を受けたほ場では、急性萎凋症状を呈する場合がある。明渠・暗渠等で排水改善を図り、罹病株は早期に抜き取り処分する。

2) 黒根腐病

土壌水分が高いと被害が大きくなりやすいため、明渠・暗渠等で排水改善を図り、罹病株は早期に抜き取り処分する。

3. 野菜・花き

1) 共通対策

- (1) 浸水や冠水により茎葉等が汚れた場合は、散水などにより汚れを落とし、損傷した茎葉や発病した茎葉の除去後、速やかに薬剤散布を行う。併せて、液肥の葉面散布等により樹勢回復に努める。
- (2) 既設の明渠に崩れや土砂がたまり停滞水が発生していないか、落水口の高低差が確保されているかを確認し、必要に応じて補修を行い、速やかに排水を図る。
- (3) ほ場内に停滞水がある場合は、明渠等の増設により表面排水を図る。
- (4) ハウス栽培の場合は、排水を図るとともに、側窓や妻面窓等の開放を行い風通しを良くする。また、強制換気の設定がある場合は積極的に活用する。
- (5) 現在収穫期に入っている品目は、品質の低下が懸念されるため、出荷基準を遵守するとともに検品等を強化する。

2) えだまめ

土壌の酸素不足により、根の活動の抑制や根腐れ症状の発生が懸念される。併せて、土壌病害の拡大が予想される。

(1) 茎疫病

- ①停滞水又は冠水を受けたほ場では、急性萎凋症状を呈する場合がある。明渠等で排水改善を図り、罹病株は早期に抜き取り処分する。

(2) 黒根腐病

- ①土壌水分が高いと被害が大きくなりやすいため、明渠等で排水改善を図り、罹病株は早期に抜き取り処分する。

(3) べと病

- ①予防散布に努める。
- ②中晩生以降の品種で汚損莢の予防として1回散布では開花日から開花3日後にフェスティバルC水和剤600倍、ライメイフロアブル2,000倍、ランマンフロアブル1,000倍、レーバスフロアブル2,000倍液を散布する。ただし、発生が多いと予想される場合は追加防除を実施する。

(4) その他（黒く変色した腐敗莢）

- ①冠水等により根が傷み、養分転流がうまくいかず、莢の表皮の薄くなった部分が雑菌により黒変した腐敗莢が発生することがあるため、出荷基準を遵守する。

3) すいか

大雨等により茎葉が傷み、冠水等で草勢が弱っているため、疫病、炭そ病等の発生が増加すると予想される。傷んだ茎葉を整理・除去し、病害の発生状況を確認しながら防除対策を行う。また、草勢の維持管理を適切に行う。

(1) 疫病、炭そ病

- ①発病前にジマンダイセン水和剤等の予防剤を散布する。
- ②炭そ病を確認した場合は、アミスター20フロアブル等の治療効果がある薬剤を散布する。また、薬害防止のためアミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない、かつ、高温時の使用を避ける。

(2) その他（果実腐敗症）

- ①収穫及び出荷作業時の選別を徹底する。出荷基準を遵守する。

4) ねぎ

大雨及び今後の高温により、軟腐病と白絹病の多発が予想される。また、土壌の酸素不足等から根の活動が抑制され、葉先枯れ症状が増え、黒斑病・葉枯病の発生が増加すると予想されるので、排水改善を図るとともに、予防剤を中心とした防除対策を実施する。

(1) 軟腐病

- ①発病株は抜き取り、ほ場外で処分する。
- ②過度な土寄せや高温時の土寄せは行わない。
- ③収穫前日数に注意し、薬剤による防除を実施する。また、異なる薬剤でローテーション散布を行う。

農薬名	希釈倍数又は使用量	使用時期	使用回数
オリゼメート粒剤	6 kg/10 a	土寄せ時但し、 収－30日	2回以内
スターナ水和剤	2,000倍	収－7日	3回以内
バイオキパー水和剤	1,000～2,000倍	発病前～発病初期	－
ヨネポン水和剤	500倍	収－7日	4回以内
Zボルドー	500倍	－	－

注意事項

ア、オリゼメート粒剤の砂地での施用は、ねぎに薬害を生じるおそれがあるので、1回の施用量を3 kg/10aとする。

(2) 白絹病

- ①発病株は菌核を形成する前に抜き取り、ほ場外で処分する。
- ②土寄せ時にモンガリット粒剤を6 kg/10a株元散布する。アフエットフロアブル2,000倍液を散布する。

(3) 黒斑病・葉枯病

- ①収穫前日数等に注意し、発病初期から薬剤防除を実施する。

農薬名	希釈倍数	使用時期	使用回数
アミスター20フロアブル	2,000倍	収－3日	4回以内
カナメフロアブル	4,000倍	収－前日	4回以内
ダコニール1000	1,000倍	収－14日	3回以内
テーク水和剤	600倍	収－14日	3回以内
パレード20フロアブル	3,000倍	収－前日	3回以内

注意事項

ア、アミスター20フロアブルは、近接散布するとねぎを湾曲させる場合があるので、散布間隔は2週間以上確保する。

5) アスパラガス

大雨による土壌の跳ね上がりから茎枯病の発生が増加すると予想される。また、ほ場が過湿になりやすく、斑点性病害（斑点病、褐斑病）の発生が増加すると予想される。また、高温多湿より軟腐病の発生が増加すると予想される。

(1) 茎枯病、斑点病、褐斑病

- ①茎葉の蒸れを防ぐため適正な立茎数を保つとともに、下枝や2次側枝の除去による管理を行って通風を図る。
- ②薬剤による防除を実施する。

農薬名	茎枯病	斑点病	褐斑病	希釈倍数	使用時期	使用回数
アフエットフロアブル	○	○	○	2,000倍	収一前日	4回以内
アミスター20フロアブル	○			2,000倍	収一前日	4回以内
コサイド3000	○	○	○	2,000倍	—	—
スコア顆粒水和剤		○		2,000倍	収一前日	2回以内
ダコニール1000	○	○	○	1,000倍	収一前日	4回以内
ラリー水和剤	○	○	○	4,000倍	収一前日	2回以内
ロブラール水和剤	○	○	○	2,000倍	収一前日	5回以内

注意事項

ア、アミスター20フロアブルには展着剤を加用しない。また、高温多湿条件下で使用すると萌芽部の曲がりを生じるおそれがある。

(2) 軟腐病

- ①発病茎は、ほ場外で処分する
- ②出荷基準を遵守するとともに、出荷前の予冷を十分に行う。

6) きゅうり

大雨等により茎葉が傷み、冠水等で草勢が弱っているため、各種病害の発生が増加すると予想される。傷んだ茎葉を整理・除去し、病害の発生状況を確認しながら防除対策を行う。また、土壌病害の発生が懸念されるため、草勢の維持管理を適切に行うとともに発病が確認された場合は次年度の対策を検討する。

(1) べと病、炭疽病、褐斑病

- ①損傷した茎葉の整理・除去を行う。
- ②発病前にジマンダイセン水和剤、ダコニール1000等の予防剤を散布する。
- ③べと病を確認した場合は、リドミルゴールドMZ、ゾーベックエニベル顆粒水和剤、ベトファイター顆粒水和剤、アミスター20フロアブル、ホライズンドライフフロアブル等で防除する。また、べと病の防除対策については防除対策情報第8号を参照する。
- ④炭そ病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、ゲッター水和剤等の治療効果がある薬剤を散布する。また、薬害防止のためアミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない、かつ、高温時の使用を避ける。
- ⑤褐斑病は、発生後の防除は効果が劣るので、発病前からシトラノフロアブル、ジマンダイセン水和剤、セイビアーフロアブル20、ダコニール1000等の予防剤を中心に散布する。発病を確認した場合は、スミブレンド水和剤等の治療効果がある薬剤を散布する。

(2) 斑点細菌病

- ①損傷した茎葉の整理・除去を行い、銅剤又はその混合剤を散布する。

(3) 疫病

- ①損傷した茎葉の整理・除去を行い、発病前にジマンダイセン水和剤を散布する。

(4) つる枯病

- ①損傷した茎葉の整理・除去を行い、発病前にジマンダイセン水和剤、トップジンM水和剤等を散布する。

7) きく

大雨及び今後の高温により褐斑病と黒斑病の発生が増加すると予想される。また、大雨以前から白さび病が発生しているほ場では、引き続き防除対策を徹底する。

(1) 褐斑病、黒斑病

- ①発病前にサンヨール、ダコニール1000等の予防剤を散布する。
- ②発病を確認した場合は、ストロビーフロアブル、トップジンMゾル、ベンレート薬剤等を散布する。

8) りんどう

大雨による雨滴の飛散により葉枯病の発生が増加する予想される。また、今後の高温により褐斑病と黒斑病の発生が増加すると予想される。

(1) 葉枯病

- ①発病初期からインダーフロアブル、ダコニール1000、チオノックフロアブル、ピリカット乳剤、ポリオキシシンAL水溶剤等を散布する。また、ダコニール1000は、展着剤（ミックスパワー）を加用して散布することにより汚れを軽減できる。

(2) 褐斑病

- ①発病初期からストロビーフロアブル、ダコニール1000、チオノックフロアブル等を散布する。また、ダコニール1000は、展着剤（ミックスパワー）を加用して散布することにより汚れを軽減できる。

(3) 黒斑病

- ①発病初期からアフエットフロアブル、ストロビーフロアブル、パレード20フロアブル、フルピカフロアブル、ベフラン液剤25を散布する。

4. 果樹

1) りんご、なし共通

- ①浸水した園地では土砂の沈積により苗木の根部等が腐敗しやすくなるため根際部を排土する。
- ②石れきが流入した園地では、地際部の樹皮を点検し、傷んでいる場合には盛土をしたり、カルス形成を促すためにバッチレートを塗布する。

2) りんご

(1) 斑点落葉病・炭疽病等

- ①斑点落葉病は連続降雨により短期間で急増するため、大雨により定期防除が遅れた園地では速やかに薬剤を散布する。炭疽病の被害果は摘み取って土中に埋める。

3) なし

(1) 黒星病、黒斑病、輪紋病等

- ①発病葉や被害果は摘み取って適切に処分する。
- ②大雨により定期防除が遅れた園地では速やかに薬剤を散布する。薬剤の散布は10日間隔で行うが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を7日程度とする。
- ③黒星病はオキシラン水和剤、オーソサイド水和剤80などの予防剤を散布する。
- ④黒斑病はオキシラン水和剤などの予防剤を散布し、発病状況に応じてナリアWDGを散布する。ただし、ナリアWDGの散布は年3回までとする。
- ⑤輪紋病はキャプレート水和剤、オキシラン水和剤、オーソサイド水和剤、ベフキノン水和剤、ベルコート水和剤、ナリアWDGのいずれかを散布する。なお、ベフキノン水和剤の使用時期は収穫前45日なので注意する。

4) ぶどう

(1) ベと病

- ①袋かけ以降にコサイド3000、ホライズンドライフロアブル又はボルドー剤等を散布する。ただし、使用する際は収穫予定日を十分に考慮する。ホライズンドライフロアブルは耐性菌の出現を回避するため年間1回の使用とし、かつQ o I 剤との連用は避ける。

(2) 灰色かび病

- ①風雨による損傷等により発病が多くなるおそれがあるため、発病葉や発病果房は速やかに摘み取り処分する。

【 問合せ先 】

秋田県病害虫防除所	TEL	018-881-3660
秋田県農業試験場	TEL	018-881-3326
秋田県果樹試験場	TEL	0182-25-4224
かづの果樹センター	TEL	0186-25-3231
天王分場班	TEL	018-878-2251
掲載HP	https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/	